

## 猫と女性

著者	堀江 珠喜
引用	女性学講演会. 2019, 22 (2), p.1-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/16407">http://hdl.handle.net/10466/16407</a>

## 第1回講演

# 猫と女性

堀江 珠喜

空前の猫ブームの今日この頃である。世界中の猫を追いかけただけのTV番組が始終放送され、各地で猫（グッズ）展が開かれ、猫カフェが開業される。ついにはペット数でも犬を追い抜いたとか。

けれども文学の世界では、『長靴を履いた猫』や『吾輩は猫である』など、昔から「猫」は活躍していた。アニメの世界でも同様だ。

また、猫好きの作家も多い。美しいだけでなく、ともすれば奔放な猫に、「自我」や「悪」が感じられるためだろうか？

さらに「猫」は「女性」のイメージと重ねて描かれることもある。猫的な女性、あるいは美女を連想させる猫などだ。

そこで今回は、最近の猫人気にあやかり、物語に登場する「猫」について、比較文学的に考えたい。

### 《猫のペット数？》

そもそもペットとして猫の数が犬を追い抜いたという最近の調査結果は、本当に信用できるのだろうか？ 飼い犬数については、狂犬病の予防注射などによって把握が容易だ。だが、犬には大別すると「飼い犬」と「野良犬」の2種しかいないのに対し、猫の場合は、「飼い猫」と「野良猫」のあいだに、「地域猫」と呼ぶべきか、誰のものでもないけれど皆で可愛がっている猫というのが、少なからず存在する。

通常「ペット」とは「飼われている生物」であり、すなわち飼い主が特定される。だが、「地域猫」は、いわば人に慣れた（あるいは人を慣らした）野良猫の一種ではあるが、これを可愛がる人間にとっては、おそらくれっきとした「ペット」であろう。

さらには、この地域猫が地域の経済効果をもたらすことも珍しくはない。瀬戸内海では、猫が自由に生活している様子を見たくて観光客が海外から訪れる島がある。雲仙のお糸地獄のそばには、温泉卵販売所があるが、暖かいので、地域猫が集まる。雑種の猫だが、店のカウンターの上に寝そべったり、販売員の足元で子猫がじゃれ合う様子が可愛くて、観光客はスマホ写真を撮りまくる。だが、卵くらい買わなくては申し訳ない気になるらしく、半数以上の猫好きは「客」となる。道路沿いで猫の来ない温泉卵販売所が不人気なのに対し、ここは商売繁盛で、まさに地域猫が「招き猫」なのだ。

ただし、あまりに可愛がられすぎるため、「猫に餌を与えないでください」との旨の注意書きが環境省によって貼られている。ここは国立公園なのだ。しかし、このような注意書き自体、地域猫が「皆様のペット」であることの証となろう。

つまり、行政がペット数の変化を発表するまでもなく、この地域猫を地域のペットとみなすなら、はるか以前に猫の数が、ペット犬を超えていたのではないかと推察できよう。

猫人気は、最近の現象ではなく、昔から、おそらくは人間が農耕を始めた直後からだったのではあるまいか？

もちろん、犬と人間との付き合いは、人類の狩猟時代からと考えられているから、猫との歴史よりは長い。だが、犬については、人間が「狼」を自分たちの狩猟目的に飼いつつ慣らして主従関係を築いたのに対し、猫は、どうやら猫の方から人間に近づいたようなのだ。

人間が農耕を始め、穀物を蓄えると、ネズミが寄って来る。そのネズミを狙って、猫が来る。そのうちに、賢い猫は、野山より人間の近くにいたほうがネズミという食料に容易にありつけることを学ぶ。人間にしてみれば、大敵のネズミを退治してくれるのだから、猫は「福の神」も同然で、

大事にする。まさにウィンウィンの関係だが、猫にしてみれば「退治」してやっているつもりはない。単に、農耕民族という便利な装置を利用し、飼い慣らしたくらいの気持ちかもしれないのだ。

このときも、猫は「飼い猫」あるいは人間を飼い慣らした「野良猫」の一種だったろう。それらを数えると、(猫は犬より長生きすることもあり) 飼い犬数を上回っていたとしても不思議ではあるまい。

## 《猫の擬人化》

雪が降ると「犬は庭駆け回り、猫は炬燵で丸くなる」の通り、いわゆる小型ペット犬が品種改良で普及するまでは、犬は外で暮らし、猫は(神出鬼没な特性もあり) より人間の近くで生活していた。また、犬と人間には主従関係があるが、猫は自由奔放で「人格」ならぬ「猫格」ともいうべき「個」が認められる。猫は、餌を要求するときには飼い主の機嫌を取るかもしれないが、猫にしてみれば、そうやって人間を飼い慣らし、食事の用意をさせているのだろう。つまり、猫と人間は同等、あるいは、時として人間のほうが、猫にお仕えしている様子さえ伺える。谷崎にしろ、三島由紀夫にしろ、猫好きにマゾヒスティックな傾向が見られるのは、偶然ではあるまい。(ただし、マゾヒストは猫のごとく身勝手に我儘な面も持っているが。) いっぽう犬好きには、サディスティックな傾向が、しばしば認められる。「主」というポジションが嬉しいのだから。

さて、そのように人間の近くにいたためでもあろうが、猫は犬に比べてはるかに「擬人化」されてきた。英語表現では「猫でも王様を見られる」(A cat may look at a king)、すなわち「誰でも(どんなに身分の低い者でも)それなりの権利を持つ」という意味の諺がある。日本でも「猫の子一匹いない」、「猫も杓子も」という表現からわかるように、猫が「誰」すなわち不特定の人間を指すのだ。つまりは、猫の擬人化である。

猫の擬人化は、「猫の手も借りたい」との表現からもうかがえよう。(犬に「お手」という芸を仕込むが、犬の前足を手とはふつうみなされない。) 視覚化においても同様で、猫が人間のように二本足で生活している様子は、

おそらく江戸時代からは面白可笑しく描かれてきたと考えられる。(れっきとした美術品でない限り、現存しないのだが。) また、漫画でも、たとえば『じゃり子子チエ』に登場する小鉄やジュニアは、猫のくせに二本足で立ち、人間にはわからないが、ちゃんと猫同士の会話が人間並みに成り立っている。

また現代日本では、ソフトバンクのコマーシャルに登場する白い犬は、あくまで犬の格好だが、同系列ワイモバイルのCMでは、擬人化された猫が登場する。つまり、猫が二本足で歩いたり、DJやらトラックの運転をしているように見せているのだ。しなやかな身体の猫はまるで手のように前足を使い、後ろ足だけで瞬間立ちすることがあり、またその頭も丸く、犬に比べて擬人化しやすいという理由も考えられよう。

なるほど、スヌーピーは二本足で立っているが、住居は犬小屋だ。飼い猫の場合、人間と居住空間を同じにするため、外に猫小屋というのはない。室内に猫ちぐらや、最近では猫家具のベッドが用意されることもある。そうなると、人間以上の贅沢な暮らしだ。(いっぽう、二本足犬の人気キャラクターは、スヌーピー以外には？と考えなければならぬくらい少ない。)

アメリカでの猫の擬人化で実話として話題になったのは、2015年、ケンタッキーの高校生が、飼い猫を大統領候補として、正式に連邦選挙管理委員会のホームページに登録してしまったことだ。30分足らずの作業で、Demo-Catと入力したらDemocratに自動変換されたとか。その直後から寄付やボランティアの申込みが舞い込んだ。もちろん「猫」と知らずにだが、取材に来たジャーナリストが真相を明らかにするや、このニュースは世界を駆け巡り、かえって支持者がふえたようだ。ヒラリー・クリントンやトランプより、猫のほうがいいとは、格言になりそうではあるまいか。

ちなみに、かつて東大では、「猫経(ねこけい)」と文二の経済学部を揶揄したそうだ。「猫より暇な経済学部」という意味である。同様に、「理1、文3、猫、文2」と、忙しい順に並べて呼ばれたらしい。その他の学部は、これらより忙しそうだから、むしろ暇な学部の中で忙しい順番をつけると、文2より猫のほうが忙しい、ただし猫は寝ていることが多いから、

経済学部はそれ以下ということだ。猫より暇な、つまり勉強しない学部でも就職先には困らぬという現実へのやっかみも感じられるが、とにかく東大の学部生ランキングに猫を入れる、これもまた、ユーモラスな猫の擬人化といえるだろう。

また、「猫殺し」は「人殺し」の序章といわれる。「酒鬼薔薇」事件もそうだったし、三島由紀夫も『午後の曳航』で、そのような少年たちを描いている。これも、ある意味、「猫」の擬人化といえそうだ。

## 《作中の猫》

このように擬人化されるほど、人間と密接に暮らしてきた猫が、芸術において描かれなはずがない。そして、事実、猫ほど多様な描かれ方をしている生物は、他にはないのだ。詳しくは、拙著『猫の比較文学』（ミネルヴァ書房）で述べたので、簡単に説明する。作品において、猫は次の4つの役目のいずれかを担って登場する。

### 1. 役に立つ猫

もともとの猫との関わりから、当然ながら「ネズミ捕り」という実際のな役割が考えられるが、当たり前過ぎて、案外、そのためだけの猫は印象に残らない。もちろん、ロンドン市長になったディック・ウィティントンの伝説的な猫はいるが、そのくらいではあるまいか。

まったく非現実的だが、『長靴を履いた猫』において、猫は知恵と勇気で、飼い主の貧しい青年を貴族に仕立て、姫と結婚させる。物凄く役に立つ猫だ。

だが、実際には、現代の文明社会においては、もはや猫は「ネズミ捕り」ではなく、「癒やし」のアイテムとして飼われている。これも当たり前過ぎて、作品を挙げるのはかえって難しいが、子供向きの絵本で堀家喜久子著『ねこじまくん』などは、孤独な少年の心を癒やす黒い子猫が、これに相当するかもしれない。

## 2. 神秘的あるいは不気味な猫

『ねこじまくん』でも、猫のような少年の存在は不気味ともいえるし、エドガー・アラン・ポーの短編小説「黒猫」、映画では『キャット・ピープル』などの化け猫、スフィンクスなど超人的猫は、枚挙にいとまがない。おそらくは、暗闇でも見え、音をたてずに歩き、小さな隙間も通り抜ける能力が、超人的で、神秘的にも思われ、不気味にも思われたのだろう。

神と悪魔は、人間の領域を越えているという意味では紙一重であり、まさに「猫」がその好例といえよう。招き猫のように、エジプト型スフィンクスのように守り神でもあり、黒猫のように悪魔の使いや悪魔の化身ともみなされるのである。

## 3. コミカルな猫

2の神秘的、不気味な猫とは対照的だが、猫はよくコミカルな存在として描かれる。漫画やアニメにおいてはほぼそうだが、東野圭吾のサイン、『不思議の国のアリス』のチェシャ猫、そのチェシャ猫を模倣したような猫が描かれている有栖川有栖の名刺など、こちらも枚挙にいとまがない。

また父親から「猫気違い（ママ）」と呼ばれた三島由紀夫が好きだったキャラクターは、ニャロメであった。いつも周囲から蹴飛ばされ、叩かれる悲哀漂うコミカル猫だ。そもそも「山寺の和尚さん」の歌にしても「猫をかんだ袋に押し込んで、ぽんとけりゃニャンとなく」だし、ピアノ初心者が弾くのは「猫踏んじゃった」と、昔から、猫はさんざんな目に遭わされる。それも、人間と生活圏を共にしているためであろう。

## 4. エロティックな猫

擬人化された猫がさらに進化すると、「人間の女性よりも女らしいと感じさせる猫」が描かれる。谷崎の『猫と庄造と二人のおんな』の雌猫は、二人の女よりも、ともすればエロティックである。また、日本語の「猫」が「芸者」をも意味するように、英語のcatは売春婦、cat houseが娼館を表す。また、「猫」を表す英語が、女性の性器をも意味することからも、猫がエロティックな存在とみなされるのは明らかだ。おそらくは、身近に

いて触ると毛がフワフワと感じられ、快感が得られるためではあるまいか。

また、画家が、女性、ときには裸婦の横に猫を添えるとき、その猫が実は女性の性器を表しているとは、よく知られた説である。ピカソも藤田嗣治も、そのような観点から鑑賞できるのだ。

## 《人間の女性と雌猫》

そこで今回の本題だが、「猫と女性」という場合、「人間の女性よりも女らしい猫」と、「猫のような女性」が考えられる。

前者については、すでに谷崎の『猫と庄造と二人のおんな』を例に挙げたが、画家ではスーザン・ハーバートがアングルの名作「ヴァルパンソンの浴女」のパロディを、人間を猫に置き換えて描いた場合、私には、アングルの女性より、この雌猫のお尻のほうがエロティックに感じられてならない。もちろん、ハーバート自身、それを認識・誇張して描いたのであろうが。

また、最近では、現代日本の女流造形作家・蟬丸が、「源氏物語」シリーズで、やはり人間の女性を艶めかしい猫に置き換えている。

そのような擬人化が、やがて人間の擬猫化を誘導してゆく。たとえば、藤田嗣治が描く人間の女性は猫的だし、猫好きの女流作家・コレットが寝そべる姿は、猫的といえまいか。

もちろん前述の、キャット・ピープルしかり。人間が猫になったのか、猫が人間になったのか、ふだんは人間の美女である。ただし、キャット・ピープルには男性もいるのだが、あまり格好良くはない。

「猫的」あるいはもっとそれが攻撃的になって「豹」のような女性が描かれると、ほぼ例外なく美女だが、猫のような、あるいは豹のような男性は、不気味なだけで素敵ではない。猫族でダンディな男性のイメージは、やはりライオンしかあるまい（タイガースファンには申し訳ないが）。

キャット・ウーマンというスーパーマンならぬスーパー化け猫も、映画化されている。これは、古代エジプトの女神で猫の姿をしたバストのパワーを受け継いだエジブシャンマウが、殺された若い美女（ラテン系か？なぜ



か、アメリカ映画で、化物はWASPではない。アダムズ・ファミリーもラテン系だ)に新しい命を吹き込み、復讐に必要な猫的能力を授けるのだ。西洋の、「猫的女性」には、このエジプトの猫女神が影響していることもありそうだ。

日本では、華族女優の入江たか子が当たり役となった「化け猫」映画もシリーズとして人気を博したが、これらに共通するのは、猫的女性は「美女」ということだ。

東野圭吾は雄猫を飼っていたので、物語にこの猫が登場するときにはコミカル、もしくは著者自身の自虐ネタの披露となる。だが、彼が猫系的女性を描くときは、決まって「悪女」、つまり悪魔的な美女である。

猫的女性は、美しくなくてはならない——いつの頃からか、そのような「お約束」が出来上がった。そのためか、「ゲゲゲの鬼太郎」においても、「ねこ娘」がグロテスクな存在から「美少女化」していることを、『週刊文春』(2018年11月15日号)で報じている。(すでに1984年『週刊少女コミック』の連載マンガ『闇のパープルアイ』では、やはり美少女が「猫」に変身する。)

物語では強悪で美しい猫として「豹」が登場するが(キャット・ピープルも猫ではなく豹に変身する)、そのように、豹の毛皮コートや豹柄が悪女の衣装として用いられるのは常套手段となる。『思春の森』でも、エヴァ・イオネスコ演じる悪コギャルは、弓を持ち、豹(正しくはチータ)柄のセクシーな服を纏っている。ハンターの姿だ。猫族は狩をする。その格好良さ(太ってはいは走れない)と残虐さ、強さに憧れるマゾヒスティックな男性心を刺激するのが、猫系女性なのではあるまいか。そしてそれを強調するのが、豹の毛皮や豹柄ファッションというわけだ。

ただし、90年代の終わり頃から、豹柄が大阪のオバチャンファッションの代表になってしまったのは、個人的には残念だ。ファッションにおいて、アニマル柄は、大阪より東京のほうがよく使われているという統計はあっても、目立つのは大阪のオバチャンなのだ。だが、悪いが、ここでは豹柄の浪速マダムが、必ずしも猫的な女性とは分類したくない。豚やカバに豹紋の模様をつけても、猫族には見えないだろう。それ以上は言うまい。

## 《『吾輩は猫である』の凄さ》

日本文学で猫といえば、やはり夏目漱石の名作を思い出すだろう。(もちろん源氏物語研究者なら、女三宮の唐猫だろうが、ここでは一般論を優先させる。)

実は、あそこには、前述した4種類の猫すべてが登場するのだ。まずは、書生からさんざんな目に遭わされる名無し猫。コミカルな猫である。そして、役に立ったのは、ネズミ捕りの名手、黒。エロティックなのは、二絃琴の師匠が飼う三毛子。最後に不気味なのは、ビールで酔っ払い、溺れ死のうとしている名無し猫である。

さらに、物語は「猫の目」というある種超人的な視点で語られる。人間にわかる言葉で物語るのは、取りも直さず、猫の擬人化によってだ。

これらを念頭に置きながら、再読すると、また違った楽しみ方ができるだろう。

## 《現代の話題》

猫ブームにあやかり、メディアもさまざまな猫の話題を取り上げる。2018年秋には、イスタンブールのファッションショーで、モデルが歩くランウェイ(別名キャットウォーク)に、猫が侵入。喝采を浴びた。そもそもある時期のキリスト教が、猫を悪魔的と嫌い殺し回ったあげく、ネズミが増えてペストの流行を招いたのとは対照的に、アラブ、そして回教は、猫を大事にした。そのため、アラブ諸国では、地域猫が多い。

このファッションショーでも、そんな一匹が、ショーに紛れ込んだらしい。

おそらくは、イベントの最中に猫が入ってくることはこれまでもあったに違いないが、現代はInstagramやSNSで、情報が世界中に拡散され、また、猫ブームということで、マスコミがさらに煽るのだろう。

いっぽう日本では、「ふるさと納税」で福岡県大川市が「ネコ家具できました」のキャッチフレーズ。大川家具が、猫に合ったサイズのソファや

ベッド、サイドボードなどの高級家具を生産している。ちなみに、ソファの場合、購入するには118,800円（税込み）で、ふるさと納税制度で入手するには372,500円寄付しなければならない。本当に猫が喜んでくれるかどうかは、保証の限りではないが。

展覧会も盛んだ。ホテル雅叙園東京の東京都指定有形文化財の百段階階段では、毎年、猫アートの展示会を催し、多くの客を集め、一部、販売もしている。ホテルにとっても出品者にとっても、まさに「福猫」たちなのだ。

さらに、ファッションでは、もう豹柄は珍しくもないが、ルイ・ヴィトンが、猫を配したカバンや、猫の顔を型どったバッグを限定品として2018年秋に売り出し、たちまち品切れ。同時に犬のシリーズも出したが、こちらのほうは完売にはなっていない。

猫好きは、自分が飼っている猫はもとより、どこの猫でも、猫グッズも気になるが、犬好きは、主従関係の築かれている自分の犬あるいは、特定の種類の犬には興味があっても、「グッズ」には関心を抱かない傾向があるのではあるまいか？

このような猫好きの心理から考えても、実は、「猫ブーム」は、もっと以前から発生していたと推測される。ただ、メディアがそれを報じず、個人もSNSやインスタグラムで発信しなかっただけなのだ。

もしかしたら1974年に登場したキティちゃんを猫ブームの始まりと考える方がおいでかもしれない。だが、世界中で愛されるHello Kitty（フランス人はエロキチと発音する）について、サンリオは2014年、猫ではないという見解を発表した。サンリオいわく、彼女は英国生まれでロンドン在住。商社マンの父、専業主婦の母と双子の妹、ミミィと猫のチャーミーとともに暮らす明るく優しい女の子なのだそう。このコメントでファンは騒ぎ、後日、サンリオはHello Kittyが猫のモチーフ（擬人化）であることを認める結果となった。「猫でない」と言われると、かえって不気味な存在に思えてしまう。しかし、当初から多くのファンが「猫」と信じて受け入れていたなら、それこそ猫ブームに大いに貢献したはずだ。しかも「猫女」ブームに！

## 《猫にかわる生物は？》

このように「猫」は、さまざまな描かれ方をされるのだが、多くの生物の中で、猫に匹敵するほどの存在はあるのだろうか？ 断じて「犬」ではない。

と、あれこれ思い巡らすうちに、作品において、猫にかなり近い扱われ方をしているのが、「蛇」と気付いた。詳しくは拙著『蛇のファッション考』で論じたが、要するに、蛇もネズミを捕る。農耕民族にとっては、蛇行する川は、神も同然。商売人にとっても蛇は「福の神」だ。長い姿は不気味でもあるが、コミカルにも描かれ得る。そして、楳図かずおの描く蛇女は、人間の姿のときには美女である。ちなみに弁財天も「蛇」で、美しい女神である。

さらに、近年、特に「セルパン」だの「パイソン」だのと、ファッションでも蛇をモチーフにしたアクセサリーやヘビ柄模様の洋服、蛇革のハンドバッグなどが流行している。とりわけ巳年の方は、蛇関連グッズを集める傾向がある。

ただし、である、猫については「癒やし」が求められるが、蛇を触って気持ちが悪くなるという者は稀だ。確かに清潔で、犬のように獣臭がなく、マンションでもペットとして飼えるという点では、猫と蛇は似ているが。

ストレスの多い社会において「癒やし」と「責任回避」が求められる現代、もしかしたら、他人より猫と暮らすほうを選ぶ者は、少なからずいて、それこそが非婚と少子化を加速させているとはいえないだろうか？

注) これは2018年12月8日に開催した大阪府立大学女性学研究センター第22期女性学講演会「文学とジェンダー」第一回公開講座「猫と女性～比較文学的に考える」をもとに改稿したものである。